暗黙の性役割理論とジェンダー格差の関連

華　雪・清末有紀・森永康子

Implicit gender role theories and gender system justification

Xue Hua, Yuki Kiyosue, and Yasuko Morinaga

Based on Kray et al.'s (2017) Study 4, we conducted two studies investigating the relationships between implicit gender role theories (i.e., people's belief about the fixedness versus malleability of gender roles) and gender system justification using two Japanese samples. As predicted, we found that, for women and men, implicit gender role theories positively correlate with system justification; individuals with a strong belief in the permanence of gender roles supported the status quo in social relations between men and women (Study 1 and 2). However, contrary to our predictions, we found no significant mediating effect of male gender identity on the relationship between implicit gender role theories and system justification (Study 1). Nor did we find a significant moderating effect of zero-sum beliefs on the relationship between male gender identity and system justification (Study 2). Results are discussed in relation to the large gender gap in Japan.

キーワード：implicit gender role theories, gender system justification, gender identity

問　題

ジェンダー平等は現代多くの国々が関心を持つ社会問題である。World Economic Forum (2021) が公表した 2021 年のジェンダー・ギャップ指数 (Gender Gap Index) では，日本は 156 カ国中 120 位で，先進国において下位にある。日本は経済参画と政治参画でのジェンダー平等にはまだ遠いことが報告された。また，衆議院と参議院を合わせた国会議員における女性議員の比率は 14.3%で，地方議会の女性議員の比率は 14.5%であり (内閣府男女共同参画局, 2022)，給与額は正社員であろうとなかろうと，同じ雇用形態であれば，男性の方が女性よりも給与額が高く，その差は年齢が高まるにつれて拡大する傾向が見られる (厚生労働省, 2021)。このようなことから日本において男性は女性よりも高い地位を占めていると言えよう。

なぜこのようなジェンダー格差があるのだろうか。Kray, Howland, Russell, & Jackman (2017) は，暗黙の性役割理論 (implicit gender role theory) という立場からこの問題を説明しようとした。ジェンダー格差を生み出している原因の一つは，男女それぞれが担っている役割つまり長い歴史の間に作

られてきた「男性は稼ぐ人，女性は世話をする人」というジェンダー役割にあると考えられる。社会的役割理論 (social role theory; Eagly & Wood, 1999) は，男女それぞれに固有の特性といわれる男性性や女性性が，こうした男女の役割分担によって生じたと主張するものである。つまり男女の心理学的あるいは社会的な違いは，生物学的で本質的なものではないと考える。ジェンダー役割が非本質的で変動可能なものであるとする社会的役割理論の考え方は，不平等なジェンダー・システムと相容れないものである。

暗黙の理論 (implicit theory) は，人間の能力や特性の可変性についての信念であり，それらを固定的なものとみなす実体理論 (entity theory) と変動的なものとみなす増分理論 (incremental theory) に分けることができる (Dweck, 1986)。主に教育心理学分野で使われている概念だが，社会心理学においても，増分理論を持っている人よりも実体理論を持っている人の方がある社会的集団に対して強いステレオタイプを持っている (Levy, Stroessner, & Dweck, 1998) ことなどが示されてきた。Kray et al. (2017) は，暗黙の理論をもとにジェンダー役割を固定的とみなすか変動的とみなすかを暗黙の性役割理論と名づけた。

Kray et al. (2017) は，暗黙の性役割理論とジェンダー格差の肯定が関連しており，固定的な役割理論をもつ人は，変動的な役割理論をもつ人に比べて，ジェンダー格差を肯定する傾向を持つと考えた。そして，高地位を占めていると思われる男性において，女性と異なり，その傾向を集団同一視 (ジェンダー・アイデンティティ) の強さが媒介すると主張した。その理由として，固定的な性役割理論は，男性集団の高い地位を意味するものであるが，男性個人の地位の高さを保証するものではないため，固定的な役割理論を持つ男性は，自分が男性集団に所属するという認識つまりジェンダー・アイデンティティを強めねばならないためである。これは，社会的地位が高い集団に所属する人たちは，地位が脅威にさらされているときに，集団への所属感を強めるといった過去の研究 (Jost, Burgess, & Mosso, 2001; Jost, Gaucher, & Stern, 2015) から示唆される。

ジェンダー格差を肯定する傾向の指標として，Kray et al. (2017) はジェンダー・システム正当化 (gender system justification; Jost & Kay, 2005) を用いた。システム正当化理論（system justification theory; Jost & Banaji, 1994）はなぜ格差ある社会が維持され続けるのかを説明する理論であり，人々は現状肯定つまり既存のシステムを正統なものとみなすように動機づけられていると主張する。そして，ジェンダー格差の維持に関わるものがジェンダー・システム正当化である。本研究の目的は Kray et al. (2017) の研究 4 で確認されたモデルに基づいて，日本社会で暗黙の性役割理論がジェンダー格差とどのように関連するのかを検討することである。

研 究 I

研究 I では，Kray et al. (2017) の研究 4 をもとに，暗黙の性役割理論がジェンダー・システム正当化に関連し，男性ではその関連をジェンダー・アイデンティティが媒介するというモデルについて検討を行った。Kray et al. (2017) の研究 4 は，教示により参加者の暗黙の性役割理論を操作したが，本研究では相関研究によりこのモデルを検討する。

仮説は以下の通りである。暗黙の性役割理論が固定されていると思う程度とジェンダー・システム正当化との間に正の相関が見られるであろう (仮説 1)。男性においてジェンダー・アイデンティティが暗黙の性役割理論とジェンダー・システム正当化との関連を媒介するであろう (仮説 2)。

方法

参加者　クラウドソーシングの Lancers を用いて，400 名の参加者を募集した。回答に不備のあった者を除いて 394 名 (女性 200 名，男性 194 名) を分析対象とした。平均年齢は 40.7 歳 (*SD* = 10.08) であった。その内，独身者は 58.38%であった。参加者の職業について，正規雇用・正規職員で働いている人 26.65%，非正規雇用・非正規職員で働いている人 13.2%，学生 1.52%，自営業・自由業 30.20%，専業主婦・主夫 14.72%，無職 10.41%，その他 3.30%であった。

質問紙の構成と質問項目　質問紙の構成は以下の通りであった。なお，各測度内の項目の提示順序は参加者間でランダマイズした (項目は付録参照) 。

1. 暗黙の性役割理論: Kray et al. (2017) が作成した 10 項目を日本語に訳して用いた。回答は 6 件法 (1 = 全く同意しない，6 = 非常に同意する) で求めた。
2. ジェンダー・システム正当化: Jost & Kay (2005) が作成した 8 項目の日本語訳 (森永・平川・福留, 2020) を用いた。回答は 6 件法 (1 = 全く同意しない，6 = 非常に同意する) で求めた。
3. ジェンダー・アイデンティティ: Becker & Wagner (2009)，Bosson & Michniewicz (2013) 及び Kray et al. (2017) から抽出した 6 項目を日本語に訳して用いた。回答は，5 件法 (1 = そう思わない，5 = そう思う) で求めた。

結果[1]

暗黙の性役割理論 (α = .924) ，システム正当化 (α = .810) ，ジェンダー・アイデンティティ (α = .681) は，それぞれについて項目の平均値を算出し，その得点とした (Table 1) 。得点が高いほど，性役割は固定されていると思う程度が高く，ジェンダー・システム正当化，ジェンダー・アイデンティティが強いことを意味する。ジェンダー差を検討したところ，ジェンダー・システム正当化では男性の方が女性よりも得点が高く，男性の方がジェンダー・システムを正当化していることが示された。しかし，暗黙の性役割理論とジェンダー・アイデンティティには有意なジェンダー差は見

Table 1
暗黙の性役割理論、ジェンダー・アイデンティティ、ジェンダー・システム正当化の平均値（研究Ⅰ）

変数	女性 M	女性 SD	男性 M	男性 SD	*t* 値	*df*	*p* 値	*d*
暗黙の性役割理論	3.71	0.83	3.71	0.81	−0.10	390	.920	−0.010
ジェンダー・アイデンティティ	3.83	0.72	3.79	0.67	−0.48	390	.631	−0.049
ジェンダー・システム正当化	3.03	0.74	3.40	0.67	5.05 ***	390	<.001	0.509

*** $p < .001$

[1] 本研究の分析は HAD (清水, 2016) を用いて行った。

られなかった。また，変数間の相関係数を男女ごとに算出したところ，暗黙の性役割理論とジェンダー・システム正当化には男女ともに有意な正の相関が見られ，仮説 1 が支持された (Table 2) 。

Table 2
暗黙の性役割理論、ジェンダー・アイデンティティ、ジェンダー・システム正当化の相関（研究Ⅰ）

	暗黙の性役割理論	ジェンダー・アイデンティティ	ジェンダー・システム正当化
暗黙の性役割理論（男性/女性）	—		
ジェンダー・アイデンティティ（男性/女性）	.217**/.070	—	
ジェンダー・システム正当化（男性/女性）	.524**/.461**	.211**/.211**	—

** $p < .01$

女性と男性のそれぞれにおけるジェンダー・アイデンティティの媒介効果を検討するために，bootstrap 法 (resampling = 2,000) による検定を行ったところ，女性では間接効果が見られなかった ($B = 0.011$, $SE = 0.014$, $Z = 0.798$, $p = .425$) 。男性ではジェンダー・アイデンティティが暗黙の性役割理論とジェンダー・システム正当化の関連を媒介すると予測したが，有意な間接効果は見られなかった ($B = 0.019$, $SE = 0.012$, $Z = 1.538$, $p = .124$; Figure 1) 。

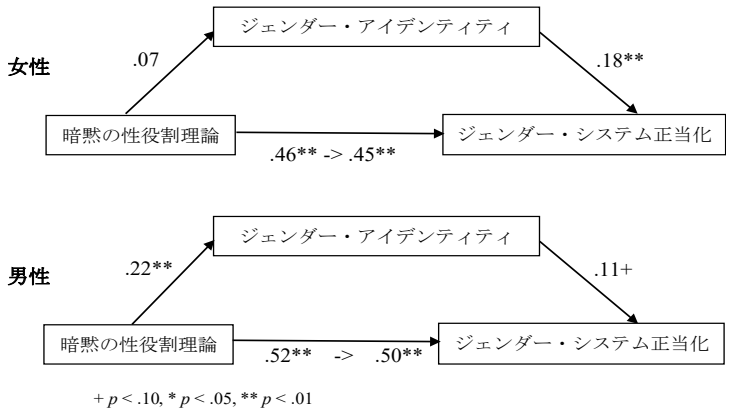


Figure 1. 女性・男性における媒介モデル（研究Ⅰ）。
数値は標準化係数。

考察

本研究では，Kray et al. (2017) の研究 4 をもとに，暗黙の性役割理論とジェンダー格差の関連を検討した。結果として，暗黙の性役割理論が固定的であるほど，ジェンダー・システムをより正当化するという仮説 1 が支持された。しかし，男性においてジェンダー・アイデンティティが暗黙の性役割理論とジェンダー・システム正当化との関連を媒介するという結果は得られず，仮説 2 は支持されなかった。この原因として，男性の場合，ジェンダー・アイデンティティとジェンダー・システム正当化の関係に，何らかの要因が影響しているのではないかと推測した。ジェンダー・アイ

デンティティが強い男性の中でも，女性を有限の資源を奪い合う競争相手と見なす場合には，男性がより多くの資源を保有している現状を維持しようとして，ジェンダー・システムを正当化するのではないだろうか。この推測を検討するため，研究Ⅱを行った。

研 究 Ⅱ

研究Ⅰでは，Kray et al. (2017) の結果と異なり，男性のジェンダー・アイデンティティが暗黙の性役割理論とシステム正当化を媒介するという結果は得られなかった。これは，ゼロサム信念が何らかの影響を与えているためではないだろうか。ゼロサム信念とは，資源の総量が決まっており，あるグループまたは個人の利益は，他のグループまたは個人の損失に直接対応するという信念である (Kehn & Ruthig, 2013)。ジェンダーに関するゼロサム信念は，女性の地位が上がったり，女性に対する差別が減ったりすれば，相対的に男性の地位が落ちたり，男性に対する差別が増えたりすると考えていることを示す。つまり，ゼロサム信念とは，男性と女性の関係を競争的に認識していることを示す信念である。過去の研究 (Bosson, Vandello, Michniewicz, & Lenes, 2012; Kehn & Ruthig, 2013; Wilkins, Wellman, Babbitt, Toosi, & Schad, 2015) により，男性が女性よりもジェンダーの地位や差別化に関するゼロサム信念を支持していることが示されている。Kray et al. (2017) は暗黙の性役割理論とジェンダー・システム正当化の関係をジェンダー・アイデンティティが媒介すると仮定しており，そこには個々の男性が自分の高い社会的地位を保とうとする動機が考えられる。もし，高地位集団に所属しているという認識を持つ男性，つまりジェンダー・アイデンティティを強く持つ男性が，女性に対する競争的認知つまりゼロサム信念を強く持っていれば，格差を生み出す既存のジェンダー・システムを強く支持するであろう (仮説 3)。したがって，研究Ⅱでは，ゼロサム信念を考慮し，暗黙の性役割理論とジェンダー格差及びジェンダー・アイデンティティの関連をさらに明確化する。

方法

参加者　クラウドソーシングのクラウドワークスを用いて，600 名の参加者を募集した。回答に不備のあった者を除いて 584 名 (女性 293 名，男性 291 名; 年齢 M = 39.41, SD = 10.67) を分析対象とした。その内，独身者は 49.83%であった。参加者の職業は，正規雇用・正規職員で働いている人 34.25%，非正規雇用・非正規職員で働いている人 20.55%，学生 4.45%，自営業・自由業 14.90%，専業主婦・主夫 15.41%，無職 9.08%，その他 1.37%であった。

質問紙の構成と質問項目　質問紙の構成は以下の通りであった。研究Ⅱでは，各測度内の項目だけでなく，各測度の提示順序もランダマイズした (項目は付録参照) 。

1. 暗黙の性役割理論: Brescoll, Uhlmann, & Newman (2013) の人の不変性 (immutability) を尋ねる 5 項目をもとに，暗黙の性役割理論を尋ねる質問項目を作成した。回答は 6 件法 (1 = 全く同意しない，6 = 非常に同意する) で求めた。
2. ジェンダー・システム正当化: 研究Ⅰと同様の項目を用いた。

3. ジェンダー・アイデンティティ: 研究 I と同様の項目を用いた。

4. ゼロサム信念: Ruthig, Kehn, Gamblin, Vanderzanden, & Jones (2017) が作成した 6 項目を日本語に訳して用いた。回答は 6 件法 (1 = 全く同意しない，6 = 非常に同意する) で求めた。

結果

システム正当化尺度 (α = .815) とジェンダー・アイデンティティ尺度 (α = .691) は研究 I と同程度の信頼性が得られた。新たな暗黙の性役割理論尺度 (α = .816) とゼロサム信念 (α = .902) も十分な信頼性が見られた。それぞれの尺度を構成する項目の平均値を算出した (Table 3) 。研究 I と同様に，得点が高いほど，性役割は固定されていると思う程度が高く，ジェンダー・システム正当化，ジェンダー・アイデンティティ，またゼロサム信念が強いことを意味する。

Table 3
暗黙の性役割理論、ジェンダー・アイデンティティ、
ジェンダー・システム正当化、及びゼロサム信念の平均値（研究 II）

変数	女性 M	女性 SD	男性 M	男性 SD	*t* 値	*df*	*p* 値	*d*
暗黙の性役割理論	3.29	0.79	3.53	0.86	3.48 ***	582	.001	0.287
ジェンダー・アイデンティティ	3.43	0.69	3.56	0.69	2.35 *	582	.019	0.195
ジェンダー・システム正当化	3.17	0.75	3.59	0.66	7.31 ***	582	<.001	0.604
ゼロサム信念	2.68	0.96	3.16	0.96	5.91 ***	582	<.001	0.489

＊ $p < .05$, ＊＊＊ $p < .001$

Table 4
暗黙の性役割理論、ジェンダー・アイデンティティ、
ジェンダー・システム正当化、及びゼロサム信念の相関（研究 II）

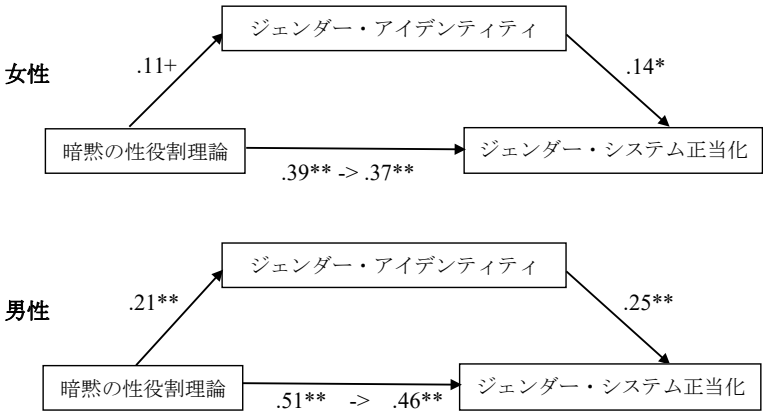
	暗黙の性役割理論	ジェンダー・アイデンティティ	ジェンダー・システム正当化	ゼロサム信念
暗黙の性役割理論（男性/女性）	—			
ジェンダー・アイデンティティ（男性/女性）	.212**/.106+	—		
ジェンダー・システム正当化（男性/女性）	.512**/.388**	.343**/.179**	—	
ゼロサム信念（男性/女性）	.220**/.261**	−.026/.014	.127*/.090	—

＋ $p < .10$, ＊ $p < .05$, ＊＊ $p < .01$

ジェンダー差を検討したところ，ジェンダー・システム正当化では研究 I と同様に，男性の方が女性よりも得点が高く，男性の方がジェンダー・システムを正当化していることが示された。しかし，研究 II では，ジェンダー・アイデンティティ，暗黙の性役割理論及びゼロサム信念においても有意な男女差が見られ，男性の方が女性よりも強いジェンダー・アイデンティティや固定的な性役割理論を持ち，さらに強いゼロサム信念も持っていることが示された。変数間の相関係数を男女ごとに算出したところ，暗黙の性役割理論とジェンダー・システム正当化には男女ともに有意な正の

相関が見られ，仮説 1 が支持された (Table 4) 。

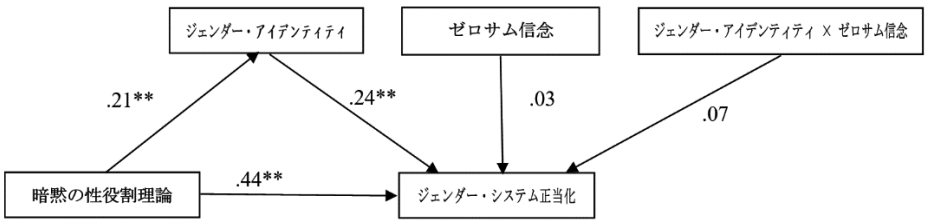
次に，媒介モデルについて検討を行った。研究 I と同様の媒介モデルについて検討した (bootstrap 法, resampling = 2,000) ところ，女性ではジェンダー・アイデンティティの間接効果が見られなかった (B = 0.014, SE = 0.011, Z = 1.249, p = .212) 。男性ではジェンダー・アイデンティティの有意な間接効果が見られた (B = 0.040, SE = 0.014, Z = 2.941, p = .003; Figure 2) ものの，ジェンダー・アイデンティティを媒介させても，暗黙の性役割理論からジェンダー・システム正当化への標準化係数には大きな差異がなく，媒介効果はないと考えられた。



+ p < .10, * p < .05, ** p < .01

Figure 2. **女性・男性における媒介モデル（研究Ⅱ）。**
数値は標準化係数。

次に，ゼロサム信念の調整効果を検討するために，男性を対象に Figure 3 のようなモデルを用いて分析を行った。しかしながら，有意な調整効果は見られず，仮説 3 は支持されなかった。



** p < .01

Figure 3.**男性におけるゼロサム信念の調整効果（研究Ⅱ）。**
数値は標準化係数。

考察

研究Ⅱは，ゼロサム信念を加え，Kray et al. (2017) が提出した媒介モデルをさらに検討した。ジェンダー・アイデンティティが暗黙の性役割理論とジェンダー・システム正当化の関連を媒介するモデルでは，各パスが有意であったが媒介効果があると言えなかった。研究 I の結果と同様に，仮説 2 は支持されなかった。

男性において，ジェンダー・アイデンティティからジェンダー・システム正当化のパスを調整すると推測されたゼロサム信念には調整効果が見られず，仮説 3 は支持されなかった。これは，本研究で使ったゼロサム信念の項目が，職業，政治，家庭内の主導権など複数の資源を含むものであったためではないかと考えられる。ジェンダー・ギャップ指数 (World Economic Forum, 2021) では，日本は，教育と健康の分野においては男女がほぼ平等であるが，経済及び政治の分野は男女平等にほど遠い。男女差が大きい分野と小さい分野では男女間の競争について認識が異なるのではないだろうか。そこで，補足的に，ゼロサム信念を 1 項目ずつ用いて調整効果の検討を行ったところ，家庭内の意思決定に関する項目において，ジェンダー・アイデンティティとの交互作用項に有意傾向の効果があった (β = .09 , t(287) = 1.73, p = .08)。重回帰分析と単純傾斜検定を用いて下位検定を行ったところ，ジェンダー・アイデンティティの強い男性 (+1SD) では回帰係数が有意であった (β = .27, t(287) = 3.66, p < .001) が，ジェンダー・アイデンティティの弱い男性 (−1SD) では有意ではなかった (β = .10 , t(287) = 1.34, p = .18)。この結果は，男性がどの分野で女性を競争相手と認識しているかによって，ゼロサム信念の効果が異なるということを示唆していると言えよう。

総合的考察

本研究では，Kray et al. (2017) の研究 4 をもとに，暗黙の性役割理論とジェンダー格差の肯定が関連し，男性の場合にはその関係をジェンダー・アイデンティティが媒介するというモデルをたて検討した。2 つの研究を通して，暗黙の性役割理論とジェンダー格差の肯定が関連していることが見出され，男女ともにジェンダー役割を固定的なものとみなす人ほど，現状のジェンダー・システムを正当化していた。これは，Kray et al. (2017) と一致する結果であった。

しかしながら，男性の場合のみ，その関連をジェンダー・アイデンティティが媒介するという予測については確認できなかった。特に研究Ⅱでは，男性の場合，暗黙の性役割観からシステム正当化への直接のパスと，ジェンダー・アイデンティティを媒介する間接的なパスの 2 つが同時に存在することが示された。Kray et al. (2017) は，男性の場合には，固定的な性役割理論によって自分が社会的地位が高い集団に属しているというアイデンティティが強まるというプロセスを仮定していたが，日本の男性には，ジェンダー・アイデンティティを経由しなくても，固定的性役割理論が直接にシステム正当化を導くと考えられる。これは，Kray et al. (2017) が研究を実施した米国に比べ，日本はジェンダー格差が大きいため，男性の社会的地位に対する脅威が弱く，米国ほどジェンダー・アイデンティティを強く持つ必要がないためなのかもしれない。

さらに，ジェンダー・アイデンティティとシステム正当化の関連について，ゼロサム信念を加えて検討したところ，ゼロサム信念全体での調整効果は見られなかったものの，どのような分野で女性を競争的にみなすかによって効果が異なる可能性が示唆された。政治や経済などの分野は男女格差が大きく，男性はあまり女性を競争相手とみなさないのであろうが，家庭内の意思決定は，時に配偶者である女性と競争関係になるのかもしれない。今後は，日本のジェンダー格差が維持されるメカニズムに，男性のジェンダー・アイデンティティや女性に対する競争的認知がどのように関与

するのかについて詳細に検討する必要があるだろう。

引用文献

Becker, J. C., & Wagner, U. (2009). Doing gender differently: The interplay of strength of gender identification and content of gender identity in predicting women's endorsement of sexist beliefs. *European Journal of Social Psychology*, 39, 487-508.

Bosson. J. K., & Michniewicz. K. S. (2013). Gender dichotomization at the level of ingroup identity: What it is, and why men use it more than women. *Journal of Personality and Social Psychology* 105, 425-442.

Bosson. J. K., Vandello. J. A, Michniewicz. K. S., & Lenes. J. G. (2012). American men's and women's beliefs about gender discrimination: For men, it's not Quite a zero sum game. *Masculinitiesand Social Change*,1, 210-239.

Brescoll, V. L., Uhlmann, E. L., & Newman, G. E. (2013). The effects of system-justifying motives on endorsement of essentialist explanations for gender differences. *Journal of Personality and Social Psychology*, 105, 891-908.

Dweck, C. S. (1986). Motivational processes affecting learning. *American Psychologist*, 41, 1040–1048.

Eagly, A. H., & Wood, W. (1999). The origins of sex differences in human behavior: Evolved dispositions versus social roles. *American Psychologist*, 54, 408-423.

Jost, J. T., & Banaji, M. R. (1994). The role of stereotyping in system-justification and the production of false consciousness. *British Journal of Social Psychology*, 33, 1-27.

Jost, J. T., Burgess, D., & Mosso, C. (2001). Conflicts of legitimation among self, group, and system: The integrative potential of system justification theory. In J. T. Jost & B. Major (Eds.), *The psychology of legitimacy: Emerging perspectives on ideology, justice, and intergroup relations*, 363-388. New York, NY: Cambridge University Press.

Jost, J. T., Gaucher, D., & Stern, C. (2015). "The world isn't fair": A system justification perspective on social stratification and inequality. In M. Mikulincer, P. R. Shaver, J. F. Dovidio, & J. A. Simpson (Eds.), *APA handbook of personality and social psychology* (Vol. 2, pp. 317-340). Washington, DC: American Psychological Association.

Jost, J. T., & Kay, A. C. (2005). Exposure to benevolent sexism and complementary gender stereotypes: Consequences for specific and diffuse forms of system justification. *Journal of Personality and Social Psychology*, 88, 498-509.

Kehn, A., & Ruthig, J. C. (2013). Perceptions of gender discrimination across six decades: The moderating roles of gender and age. *Sex Roles: A Journal of Research*, 69, 289-296.

厚生労働省 (2021). 令和２年賃金構造基本統計調査の概況の訂正について Retrieved from https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/chingin_seigo_20210408.pdf (2022 年 1 月 20 日)

Kray, L. J., Howland, L., Russell, A. G., & Jackman, L. M. (2017). The effects of implicit gender role theories on gender system justification: Fixed beliefs strengthen masculinity to preserve the status quo. *Journal of Personality and Social Psychology*, 112, 98-115.

Levy, S. R., Stroessner, S. J., & Dweck, C. S. (1998). Stereotype formation and endorsement: The role of implicit theories. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1421-1436.

森永康子・平川真・福留広大 (2020). ジェンダー・システム正当化は人々に幸せをもたらすのか 日本心理学会第 84 回大会発表資料 Retrieved from https://osf.io/9mxbj/ (2021 年 5 月 17 日)

内閣府男女共同参画局 (2022). 女性活躍・男女共同参画の現状と課題 Retrieved from https://www.gender.go.jp/research/pdf/joseikatsuyaku_kadai.pdf (2022 年 1 月 20 日)

Ruthig, C. J., Kehn. A., Gamblin. B., Vanderzanden. K., & Jones, K. (2017). When women's gains equal men's losses: Predicting a zero-sum perspective of gender status. *Sex Roles volume*, 76, 17-26.

清水裕士(2016). An introduction to the statistical free software HAD: Suggestions to improve teaching, learning and practice data analysis. *Journal of Media, Information and Communication*, 1, 59-73.

Wilkins, C. L., Wellman, J. D., Babbitt, L. G., Toosi, N. R., & Schad, K. D. (2015). You can win but I can't lose: Bias against high-status groups increases their zero-sum beliefs about discrimination. *Journal of Experimental Social Psychology*, 15, 1-14.

World Economic Forum (2021). Global Gender Gap Report 2021. Retrieved from https://www3.weforum.org/docs/WEF_GGGR_2021.pdf (2022 年 1 月 20 日)

付記

本研究は JSPS 科研費 JP21K02978, JP21H0093 の助成を受けた。

付録

暗黙の性役割理論

研究 I

1.こんなことを言うと世間ではあまり評判がよくないが，男性と女性はこれからもずっと異なる役割を担うだろう

2.私は，男性と女性は，これからもずっと社会の中で異なる役割を担うと思う

3.男性は，女性とは違う役割に向いていると思う

4.どんなに社会が進歩しても，社会における女性と男性の役割の違いは続くだろう

5.たとえ私が認めたくないと思っても，男性と女性は社会で異なる役割を持ち続ける

6.私は，男性と女性が社会で果たす役割が異なることに，真の理由があるとは思わない (逆転項目)

7.社会が進歩すれば，男性と女性はいずれ同じような役割を担うようになる (逆転項目)

8.男性も女性も，社会におけるほとんどの役割に適している (逆転項目)

9.男性と女性が社会において同じ役割を占めるようになるのは時間の問題だ (逆転項目)

10.男性と女性が社会において同じ役割を果たすようになるのは時間の問題だ (逆転項目)

研究Ⅱ

1.男性と女性の役割は異なっており，変えることはあまりできない

2.一人一人は違っていても，男女それぞれの役割の中で，重要な部分は変えられない

3.男女の役割の違いは簡単に変えることができる (逆転項目)

4.男女それぞれがどのような役割をはたすかは決められているので，誰にも変えることはできない

5.男女がそれぞれ担っている役割は，性別にかかわらず誰でもこなせる (逆転項目)

ジェンダー・システム正当化

1.今の日本社会では，男性には男性にふさわしいもの，女性には女性にふさわしいものが手に入るようになっている

2.一般的に，男女の役割は異なっているが，それは納得できる役割分担だ

3.性別によって仕事を分けるというやり方は，社会全体のためになっている

4.日本社会にはいまだに女性差別がある (逆転項目)

5.日本では，男女のどちらかが得をし，どちらかが損をしているというわけではなく，男女間は公平である

6.女性にとって，日本は住みやすい国だ

7.性別による役割分担は，根本的に改革する必要がある (逆転項目)

8.日本は，男性も女性も，富や地位をつかむチャンスが同じようにある

ジェンダー・アイデンティティ

1.私は女性（男性）という集団の一員だ

2.私は他の女性（男性）と強いつながりがある

3.女性（男性）であることは，私が自分自身についてどう感じるかにはほとんど関係がない (逆転項目)

4.私にとって女性（男性）であることは自己イメージ（あなたが持っている自分自身のイメージ）の大切な一部分だ

5.私は女性（男性）であることを恥じている (逆転項目)

6.女性（男性）であることは私にとって大切だ

ゼロサム信念

1.女性が良い職を占めるようになると，男性が良い職を得る機会が減る

2.女性が権力を持てば持つほど，男性の権力は低下するようになる

3.女性の経済的利益は男性の経済的損失につながる

4.女性が政治に影響力を持てば持つほど，男性の政治への影響力は低下するようになる

5.女性が社会的地位を得るようになると，男性はだんだん社会的地位を失う

6.女性が家庭内の意思決定の際に主導権を握ると，男性の家庭内での意思決定の際の主導権が失われる